

三宅、コミ福辞めたってよ

三宅 雄大

(元福祉学科教員)

1. はじめに

立教大学コミュニティ福祉学部・福祉学科に着任したのは、2019年4月のことである。何だかドタバタの入職だったことを覚えている。そして、そのままジタバタと動き回っていたら2年が経ち、コロナ禍のなか2021年3月にドタバタと退職していた。

改めて思い返してみても、非常識が服を着て2年間ジタバタしていただけなので、コミュニティ福祉学部の教職員・学生の皆さまには、本当にご迷惑しかおかけしていないと思う。それでもなお、温かく接してくださった皆さまには感謝しかない。

以下では、そんなジタバタしていた2年間を簡潔に振り返りたいと思う。

2. 助教／教員／研究者としての反省

第1に、福祉実習教育室の助教としての2年間。私自身は、社会福祉士実習を経験したことがなく、また、社会福祉関連の職場で働いた経験もなかった。それゆえ、実習助教としての業務は、文字通り「はじめて」の連続であった。

そのうえ、2年度目は、COVID-19の感染拡大により通常の業務の流れ・働き方は成立しなくなっていた。そのため、正直なところ、未だに業務の6割も理解できていない気がする（ただし、COVID-19がなくとも6割程度しか理解できていなかった可能性は高い）。

とはいえ、福祉実習教育室の業務で学んだことは大きい。とりわけ、大学教員の研究教育活動（この文脈では特に福祉士実習）がいかに多くの人間の協働によって成立しているのか、そしてまた、教職員が協働して働くことの面白さと難しさ、これらのことを当事者として経験できたことは大きい。今後、大学教員として組織で働いていくなかで、そこには「顔」のある教職員の労苦があること、このことはずっと覚えていたいと思う。

第2に、大学教員としての2年間。コミュニティ福祉学部では、講義（社会政策、

社会保障論)と実習関連の演習(社会福祉援助技術演習、実習指導等)を担当させてもらった。とりわけ、講義科目では、抽象(社会理論、規範理論等)と具象(制度・政策、統計、事例等)を飛び回りながら好きに議論をさせてもらった。

いずれも自分が授業を楽しむことを最優先にしていたのだが、思いがけず学生からポジティブな反応をもらえ、教員としてとても励みになったことを覚えている。学生は、あくまでも「手前の頭で」学びたいのだなと痛感した。その意味で、余白のない学びは少し息苦しく、程よい「緩さ」が大事なのだと気づかされた。

最後に、研究者としての2年間。恥ずかしながら新規の研究業績は、学会報告をした程度でほとんど出せなかった。このことは強く反省している。しかしながら、新たな研究計画に向けて競争的資金(科学研究費助成事業・若手研究)を獲得できたこと、ならびに、過去の研究(博士論文)を書籍化し総括できたことは、自分のなかでは大きな前進であった。いずれも、立教大学・リサーチイニシアティブセンター(研究助成・出版助成)の支援・助成を受けて実現したものである。記して感謝したい。

こうやって、あらためて2年間を振り返ってみると、意外と色々なことを考えながらまじめに頑張っていたようにも思うし、その実、なにも頑張っていなかったようにも思えてくる。どちらも真でどちらも偽なのだと思う。

いずれにしても、自分の初職が立教大学・コミュニティ福祉学部・福祉学科でよかったと思っている。あらためて、教職員・学生の皆さまに心より感謝申し上げたい。

3. おわりに

数奇なご縁で2021年4月からお茶の水女子大学・文教育学部・人間社会科学科・社会学コースに勤めることになった。我ながら、政治経済学(学士)に始まり、社会福祉学(修士・博士・初職)、社会学(現職)と落ち着きのない人生だと思う。そう思いつつも、「上善水如」をモットーとしているので、結局、今後も流されるがまま流れていくのだろうと思う。

とはいえ、現在の職場でも、主として社会政策・社会福祉関係の講義・演習を担当しており、学生と議論していることは今までと変わらない。要は、理不尽に割を食っている人がいること、そのメカニズムを論理的・実証的に明らかにし、必要な政策・制度・支援を論理的・実証的に提示すること。結局、場所が変わってもやっていることは変わらない。

ただ、自分(社会政策／社会福祉／貧困問題を専門とする研究者)が、国立大

学／女子大学／社会学という組織（場）にいるからこそできることは何か。このことは、あらためて考えていけないといけないと思う。でも、あまり考えすぎるとお腹が痛くなりそうなので、ほどほどに気が向いたら考えようと思う。

最後に。いまでも私は職場に向かうために中央線に乗っている。とはいえ、これまで（高尾方面行）とは反対方面である。こちら側のホーム（東京方面行き）から向こう側（高尾方面行き）を見てみると、西国分寺で武蔵野線に乗り換えていたこと、新座駅からスクールバスに乗っていたこと、5号館の階段、福祉実習教育室の扉、中庭のキッチンカー（ケバブ屋さん）、福祉実習教育室からの夕景、学費の大半が充てられていると噂のクリスマスツリー、頭を冷やすために歩いたキャンパスから駅までの帰り道、等々、そんな色々を思い出す。

離れてみると、自覚していたよりも立教新座に愛着があったのだと気づかされる（立教池袋は別にそうでもないということにも気づかされる）。ただ、私の記憶力は悪いので、この感覚もどうせそのうち忘れてしまうと思う。だから、そうならないうちに、ふらっと新座キャンパスを訪れたいと思う。そのときは、皆さま、どうか無視しないで色々と話してやってください。

今後ともどうぞよろしくお願ひ致します。